



明治学院大学図書館付属

遠山一行記念

日本近代音楽館

TOYAMA Kazuyuki Memorial Archives

of

Modern Japanese Music

館報 (第5号)

目次

音楽館の近況

第四回レクチャーコンサート報告

第五回レクチャーコンサート「浅草オペラー」〇〇年の回想」予
告

明治期の軍楽家たち——フェントン・エッケルト・吉本光蔵——

「遠山」一行先生とモーツァルト」

〈コラム〉著作権あれこれ③〉

資料受入報告

日誌から

編集後記

音楽館の近況

●開館五周年

今年五月、音楽館は開館五周年を迎えた。この間、日本の近代・現代音楽の専門資料館として、学内のみならず学外からも多くの音楽関係者、研究者が来館され、登録利用者は六百人を超えた。新設記念文庫としては、渡邊曉雄、若杉弘、渡邊浦人、石井敏、松永通温、飯田隆、石川義一、石井基斐、塩見允枝子各氏の資料を受贈、既存文庫にも引き続き資料、情報のご提供を受けている。また、出版社、演奏団体、機関団体からは、出版物、演奏会情報、プログラムなどを多数ご寄贈いただいている。改めて御礼申し上げたい。



先号で概要に触れた音楽館のOPAC（オンライン蔵書目録）は、旧システムからの移行を経て、新システム上で、書籍、楽譜、CDなど、出版物データの入力を開始した。手稿資料はその整理に時間を要するため、公開までの間、可能な限り所蔵調査にお応えするよう準備を進めており、一部代行検索によって情報を提供している。

なお、資料によっては閲覧、複写等に際して手続きが必要な場合があり、特に手稿資料の閲覧は、準備のため一週間程度の猶予をいただいで

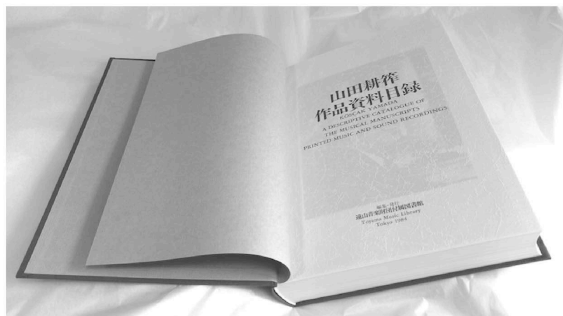
いる。来館予約の際、閲覧希望資料をお伝えいただきたく、ご理解、ご協力をお願いしたい。

●国立国会図書館デジタル化資料送信サービス

国立国会図書館「歴史的音源」配信サービスに続き、同館デジタル化資料送信サービスへの参加登録を完了、二〇一五年三月五日より利用に供している。

デジタル化資料送信サービスは、国立国会図書館がデジタル化した資料のうち、入手困難な資料を国会図書館の承認を受けた図書館等に送信するもので、二〇一四年一月に始まった。対象資料は一四二万点（二〇一六年七月現在）。一九六八年までに受け入れた図書、明治期以降の貴重書等、二〇〇〇年までに発行された雑誌（商業出版されていないもの）、一九九一〜二〇〇〇年度に送付を受けた論文（商業出版されていないもの）が含まれ、楽譜、音楽書、音楽雑誌も多い。送信を受けた資料の閲覧とともに複写サービスも可能。利用手続きについては館内閲覧カウンターまでお問い合わせください。

● 『山田耕筰作品資料目録』 委託販売



遠山音楽財団附属図書館編・発行

『山田耕筰作品資料目録』（一九八四年刊 第三回中島健蔵音楽賞受賞）は、旧音楽館閉館に伴い入手できない状態が続いていたが、このほど残部販売の準備が整い、来年早々にもアカデミア・ミュージックにて販売開始の運びとなった。この目録は山田耕筰研究の基礎資料であるとともに、当館「山田耕筰文庫」収蔵の山田作品蔵書目録でもあり、再発売の要望が多数寄せられていたもの。お問い合わせはアカデミア・ミュージック（電話〇三二二八一 三二六七五一 <http://www.academia-music.com/>）まで。

また、二〇一三年、明治学院創立一五〇周年事業の一環として企画された特別展「五線譜に描いた夢―日本近代音楽の一五〇年―」の図録は、引き続き東京オペラシティ「ギャラリー5」（東京オペラシティ三階アートギャラリー手前 電話〇三二五三三三三 〇四四九）、及びナディッフオンライン（<http://www.nadiff-online.com/>）で販売されている。

第四回レクチャーコンサート報告



昨年一〇月一七日（土曜日）、本学白金キャンパスアトリートホールで、日本近代音楽館レクチャーコンサートシリーズ「遠山一行先生とモーツァルト」が開催された。

今回のレクチャーコンサートは、旧音楽館館長で、二〇一四年一二月に亡くなられた音楽評論家遠山一行氏を偲び、最晩年の著書『モーツァルトをめぐる十二章』を中心に、氏のモーツァルト観に迫ろうとするもの。第一部はモーツァルト研究の第一人者、海老澤敏氏のお話、第二部は、篠原悠那（VO）、北田千尋（VO）、西悠紀子（VA）、日下部杏奈（VC）の各氏による演奏で、曲目は「弦楽四重奏曲第一四番ト長調 K三三七（ハイドン・セット第一番）」「弦楽四重奏曲第一九番 ハ長調 K四六五（ハイドン・セット第六番）」、アンコール曲にモーツァルト「ディヴェルティメントニ長調 K一三六（二二五a）」第三楽章。遠山氏と長く親交を結ばれた海老澤氏の温かいお話とフレッシュな演奏を堪能した来場者から多くの賛辞が寄せられた。「四―五面に抄録掲載」

また、会場内では海老澤氏持参の貴重な「ハイドン・セット」初版（アルタリア 一七八五）とともに、音楽館蔵書より遠山一行氏のモーツァルト関係著作が展示された。



第五回レクチャーコンサート「浅草オペラー100年の回想」予告

一二月二三日（水曜日）、本学白金キャンパスアートホールにおいて、芸能史家倉田喜弘氏と、声楽家黒田晋也、小林晴美の両氏、ピアノ伴奏に山中聡子氏を迎えて音楽館レクチャーコンサートシリーズV「浅草オペラー100年の回想」が開催される。

◎概要

帝劇歌劇部（洋劇部）解散の後、それを引き継いだローシーも挫折、ところが浅草へ進出したオペラは大繁盛。舞台に立つ女優たちを男子学生が応援したのが始まりである。以下三点を中心に、百年の歴史を遡る。

一、女優たちの報酬は少なく、後援会がなければ生活は成り立たない。学生と女優たちの動きを風俗の観点から警察は重視する。

二、宝塚少女歌劇の生みの親・小林一三はこのように語っている。「女の子は、膝から上



はどんなことがあっても出さない。もつとバツとまくつて、足を見せなくてはいかんと先生方がやかましくいつても、いうことは聞かない。非常に困った。」（『宝塚漫筆』抄記、昭和三〇）

三、若い世代は、「リゴレット」や「コロッケの唄」のような洋楽器による歌を口にしはじめ、歌うという娯楽の領域が急速に広がっていく。

出演

倉田喜弘（お話）

黒田晋也（テノール 二期会会員 「オペレッタ座」代表）

小林晴美（ソプラノ 二期会会員 「オペレッタ座」副代表）

山中聡子（ピアノ 東京室内歌劇場会員）

曲目

「チツペラリーの歌」「ダブリン湾の歌」（「女軍出征」）、「コロ
ツケーの唄」「おてくさん」（「カフェーの夜」）、「恋はやさし
い野辺の花よ」（「ボツカチオ」）、「ハバネラの歌」（「カルメ
ン」）ほか

日時 一月二三日（水・祝日） 一五時三〇分開演

会場 明治学院大学白金キャンパス アートホール

主催 遠山一行記念日本近代音楽館

*入場無要予約（東京コンサーツ 03・3200・9755）

仕事の周辺

明治期の軍楽家たち

——フェントン・エツケルト・吉本光蔵——

塚原康子

ここしばらく、明治期の海軍軍楽長・吉本光蔵（一八六三〜一九〇七）の日記に取り組んでいる。吉本は、一八七八年に十五歳で海軍軍楽隊に入隊し、一八九九年〜一九〇二年に海軍軍楽隊から初めてドイツに留学した。《君が代行進曲》や日露戦争後の《観艦式行進曲》などを作曲し、一九〇五年に始まった日比谷公園奏楽を指揮した人物でもある。二〇〇三年に御子孫が日記を所蔵されていると知り、初めてお訪ねする道々、「留学中の日記が残っていて、滝廉太郎や幸田幸が出てきたりすると面白いですね」と谷村政次郎氏と会話したことが懐かしい。蓋を開けてみれば、日記は留学期の一九〇〇年〜一九〇二年と、日露戦争従軍期をはさむ一九〇四年〜一九〇六年の六年分で、一九〇一年五月にライブツイヒへ赴く途次ベルリンに立ち寄った滝と、当時ベルリン高等音楽院に在籍していた幸田と吉本の三人がグノーのオペラ《ファウスト》を観劇した記事など、願った通りの内容が含まれていた。聞けば、吉本は日記の入ったトランクを「これだけはどうしても残すように」と家族に言い遺したのだそうだ。

吉本は現在の有楽町にあった鳥取池田藩上屋敷内に生まれた。父は藩の勘定方で、町人出の母は長唄が上手だったという。日記や出納帳に示された吉本の記録魔的な面と、音楽的方面の源が偲ばれる。海軍軍楽隊入隊時、一家は銀座の八官町（現在の銀座八丁目）に住んでいたが、周辺は新橋芸妓の中心地で三味線音楽に溢れていた。後年《越後獅子》《春雨》などの三味線音楽を五線譜

化し出版する下地も、こうした環境にあったのだろう。翌一八七九年には、二十六歳のエツケルト（一八五二〜一九一六）が着任し、海軍音楽隊は前任のフェントン（一八三一〜一八九〇）に学んだイギリス式からドイツ式の軍楽へと転換する。その中で吉本はドイツ語を学び、師の家族とも親しい間柄となった。やがて一八九九年に、吉本は軍楽の実技（専門はクラリネット）・理論・組織制度の研究調査のため、三十五歳でドイツ留学を命じられる。ベルリン高等音楽院には、一八七四年から軍楽長養成のための

「軍楽学生」が一般学生と別に置かれていた。一九〇二年版『ドイツ軍楽員年鑑』によれば、当時のドイツには四三六隊もの軍楽隊があり、ベルリン高等音楽院には各地の軍楽隊から派遣された三十九名の軍楽学生が在籍していた。その中に、日本海軍の軍楽長として吉本の名も記載されている。軍楽学生は通常科目のほか、ロスベルクが指導する軍楽合奏の授業を受け、ベルリン近郊に駐屯する連隊の軍楽長試験にも陪席した。帰国する吉本をポツダム停車場まで見送ってくれたのも彼らだった。折しも近年、エツケルトやフェントンに関する新事実が明らかになり、「少年鼓手からの叩き上げで、英国陸軍第十連隊の軍楽長として横浜駐屯中に現地採用されたフェントン」に対し、「ブレスラウとドレスデンの音楽学校を卒業し、ドイツ本国から雇い入れたエツケルト」という従来の見立てが揺らいできた。エツケルトについては、ヘルマン・ゴチエフスキ氏を代表者とする研究プロジェクト（筆者も所属）が進行中で、没後百年を迎えた今年、展覧会とシンポジウムが開催された。エツケルトはシュレジアの辺境の町ノイローデ（現ポーランド領）の出身で、近傍の軍事都市ナイセで軍楽隊勤務を始め、軍港ウィルヘルムスハーフェンの軍楽隊在勤中に、日本の海軍省からの雇教師募集に応じて来日するのだが、それまで軍楽長の経験はなく、二つの音楽学校で正規教育を受けたという通説を裏付ける証拠も見つかっていない。エツケルトは、アマチュアの音楽活動に従事していた父から手ほどきを受け、地元の音楽

熟や軍楽隊での現場経験を通して腕を磨いた可能性が高い。こうした経歴は当時のドイツの地方都市では珍しくなく、多くは管楽器のほか弦楽器や合唱の指導にも一通り通じていた。

フェントンについても、秋山紀夫氏や今村朗氏の調査により生没年や来日前・離日後の足取りの詳細が判明し、従来のイメージが修正された。父を早く亡くしたフェントンは、十一歳で軍務に付き、所属連隊に随って英本国のほかインド、ジブラルタル、マルタ、ケープ植民地などを転勤の末、一八六八年に維新直後の日本に到着した。その間、第二十五連隊在勤中の一八六三年から、一八五七年に設立された陸軍軍楽学校で十八ヶ月間の教育を受けた後、第十連隊の軍楽長となった。フェントンの豊富な外国体験と陸軍軍楽学校での最新の軍楽長教育は当時の世界帝国イギリスなればこそだが、ベルリンのような大都市での生活経験も故国を離れた経験もなく、極東の東京やソウルに赴任して初めて軍楽隊を指導したエツケルトとは対照的ともいえる。翻って吉本を考えると、多彩な音楽が身近に息づく大都市・江戸に生まれ育ち、第一世代としてはかなり早い十五歳から西洋音楽を学び始め、二十余年後にはドイツ本国に渡って軍楽長の正規教育を受け、多くの新知識を日本に持ち帰った。帰国後、日露戦争に従軍した一年余を含め五年しか生きられなかったにもせよ、見方によっては師のエツケルト以上の音楽体験を成就したようにも見える。とくに、ベルリンで見聞したと同様の野外演奏会が、地元の日比谷公園で定期開催され、西洋曲・邦楽曲を交えたレパートリーを東京市民に披露できたことは、二つの音楽世界に親しんだ吉本にとつて無上の喜びだったのではないだろうか。

（つかはら・やすこ 館収書委員 東京藝術大学教授）

「遠山一行先生とモーツァルト」

「第四回レクチャーコンサート抄録」

海老澤敏

今日は「遠山一行先生とモーツァルト」というタイトルでお話をさせていただくことになりました。遠山先生には、シヨパンとか、近代、現代音楽の話題の方が相応しいような気もいたしますが、先生のモーツァルト好きは以前から存じ上げておりましたので、今日は遠山先生にお呼びかけして、ご一緒にモーツァルトのお話をしたいと思います。よろしくお願いいたします。

考えてみますと、ご生前、遠山先生とはモーツァルトの話はほとんどいたしませんでした。ただ一度、一九八一年に先生が長く携わってこられた草津の音楽祭「草津夏期国際音楽アカデミー現草津国際音楽アカデミー&フェスティヴァル」で、お話をさせていただいたり、鼎談―遠山先生と鷺見洋一先生と私―をさせていただいたりしたことがあったのを思い出しました。音楽祭では、モーツァルトが子供の時、一家で西方へ旅行した時に、ロンドンでシンフォニーを書き始めて五曲書いたと言われているうちの、見つからなかった曲 [K.Anh. 223 (19a)] が見つかったというので、その日本初演が行われました。モーツァルト研究にとつて、また日本のモーツァルト研究にとつて思い出深い年でした。遠山先生は、音楽批評、音楽評論だけでなく芸術評論をお書きになって、忘れることのできない存在でいらつしやいます。東京帝大美学のご卒業で、一九四六年、大学院に進まれたところから『音楽芸術』『音楽之友』『毎日新聞』に批評をお書きになっていきます。そして、一九五一年に初めてヨーロッパにいらつしやつて、パリ大学、パリ国立高等音楽院の両方で学ばれました―この年、

私は東大に入り、五三年に美学に進学しました。パリ大学は、当時フランスで唯一、音楽学の講座があったところで、教授はジャック・シャイエ教授お一人でした。実は私も一九六二年にパリ大学に留学したのですが、その時もまだ、シャイエ教授がお元気でしたので、遠山先生とは日本でもフランスでも同門、ということになります。

プログラムの「遠山一行モーツァルト関係著述・論稿等目録」をご覧ください「別掲参照」。これは、今回のお話をいただいてから、先生のご本や先生が雑誌にお書きになったものを調べて作成したのですが、一番最初の「音楽史上に於けるモーツァルトの位置」を拝見して私が注目したのは、こんなところですか。「私は歴史家たる事を選んだ」。私は西洋音楽史の専門家としてこれを論じる、ということですね。そしてその後、「モーツァルトは歴史の網にかゝるまい。だが、一人の歴史家が彼の音楽の網にかゝつていけないという法はあるまい」。先生は、フランスに留学される前に、自分は音楽研究者、音楽学者、音楽史の専門家なのだ、という事を堂々とおっしゃっている。「そしてこの辺にそろくモーツァルトの問題をつかみ出して来る事は可能であるかも知れない。けれども今日の私の役割が先ず第一に歴史家である事であつたとすれば、……」ともおっしゃっています。

『モーツァルトをめぐる十二章』という本は、遠山先生最後の単行本ですが、ここにフランスでの夏休みのお書きになっています。「すではるか昔―半世紀以上も―のことになるが、一九五二年の夏、南フランスのエクスの音楽祭で『フィガロの結婚』を見たのは忘れ難い思い出である。私は、その前年の秋にパリに留学したが、はじめての夏休みに、地中海岸の小さな港町で友人たちと自炊をしながら海水浴などを楽しんでた。ヨーロッパの戦後が漸く終わろうという頃で、音楽祭のようなものも各地でそろそろ始まっていたのである。エクスはマルセイユの北方数十軒のところにある、余り大きくはないが、大学もある古い町であ

る。セザンヌの故郷として記憶している方も多いだろう。そのメイ・ストリートともいうべきミラボー大通りは、道巾が広く、両側にそれぞれ二列にプラタナスの大樹が並んでいて、南仏の強い太陽をさえぎっていた。最近では、この辺りも夏には観光客であふれるようなにぎわいになるが、当時はまだ静かだった。歩道にはり出したカフェのテラスでは、作曲家のプーランクが数人のとりまきと一緒にのんびりと時間を過している姿が見られた。音楽祭は、そこから少し離れたカトリック司教の館の中庭につくられた仮の小屋で行われていた。この時の『フィガロ』も、いまのような華やかな舞台とはちがって簡素なものだったが、各地から集められた歌手たちによる上演は、いま考えても大変高い水準のものであったと思う。指揮者のハンス・ロスバウトは現代音楽の分野で名声のあった人だが、モーツアルトの古典的な格調を保ったすぐれた演奏だった。日本では、まだ本格的にオペラの公演がなかった頃だから、私はたちまちそれに捕えられた（四一六頁）。日本では昭和二十年代にモーツアルトの歌劇上演が始まっているのですが、ほとんどありませんでした。遠山先生はこの一九五二年のエクサンプロヴァンスの音楽祭で「フィガロの結婚」を観て、初めてモーツアルトの本当のオペラに触れた、と言われているのです。私も一九六二年にフランスに留学して、六三年の夏、一度遠山先生ご夫妻がお子様たちを連れられて、パリに滞在なさっていました。いくつかの音楽祭巡りをいたしました。最初の音楽祭がエクスで、私が観たのは「イドメネオ」でした。昭和三十年代ですと日本ではもうオペラはたくさん観られたし、NHKがイタリアオペラを呼んだりしていましたから、オペラについては結構勉強していたのですが、日本ではまだ「イドメネオ」は上演されていませんでした。ですから、「イドメネオ」で遠山先生と同じ体験をしたわけですね。これは私にとって非常に重要な体験でしたので、遠山先生のご生前に、こういうこともお話したか

ったな、と思います。先生のご本では、「第六章 豊饒な人間ドラマ 『イドメネオ』など」で、「イドメネオ」について触れられています。

遠山先生のモーツアルトオペラ論は非常に明快で、ウィーン時代のオペラにランキングをつけておられます。「フィガロ」が最高、そして「ドン・ジョヴァンニ」、「コジ・ファン・トゥツテ」はちよつと問題がある、そして「魔笛」は別格。このあたり、私は先生とは意見がちよつと異なるのですが、ご生前にそういうお話もしてみたかったと思います。

さきほど草津の音楽祭のお話をしましたが、鼎談の時に、私は四冊の楽譜を携えて行きました。モーツアルトの弦楽四重奏曲集、「ハイドン・セット」の初版初刷りです。今日はそれを持ってきましたのであとでご覧ください。これは私の宝物です。「ハイドン・セット」は一七八一年、モーツアルトがウィーンに行った年の最後の日、十二月三十一日に第一曲—これからお聴きいただく最初の曲—が完成しています。そのあと丹念に書き進めていって一七八五年の二月に作り上げ、ハイドンに聴いて貰い、そしてその年の九月の初めにこの初版に献呈の辞をつけて贈っているわけです。遠山先生は、この弦楽四重奏について、「第三章 危機と他者意識 『ハイドン四重奏曲』」で取り上げていらつしやいます。先生は—私とはちよつと違うのですけれど—、ウィーン時代の作品にすべてが収斂している、という捉え方をされています。モーツアルトは、まだ一五歳の頃にイタリア旅行に行つて六曲の弦楽四重奏曲（「ミラノ四重奏曲」）を書き、そして第一回のイタリア旅行から帰つてすぐ、三回目のウィーン旅行でハイドンやウィーンの弦楽四重奏曲の影響を受けて六曲の四重奏曲（「ウィーン四重奏曲」）を書いていきます。しかし、それはまた本物のモーツアルトではない、と先生はおっしゃる。ウィーンに定住後、この「ハイドン・セット」ではものすごく苦勞して、六曲を足かけ五年、実質四年間近くかかっていますが、この弦楽四重奏というジャンル

を、ハイドンを学びながらハイドンとはまた違った境地を拓いた、それをハイドンもまた認識していた、ということをお話していただけるわけです。この第三章で、先生は六曲それぞれにご自分の注釈、解釈を加えていらつしやいます。ここで少し読ませて頂きます。「最近この曲」「狩」を「ウィーン・クワルテット」の演奏で書いたが、第一ヴァイオリンのウエルナー・ヒンクの繊細な音とその旋律を美事に実現しているにおどろいた。全集版のレコード「海老澤敏監修『モーツァルト全集』小学館刊」のイタリヤ弦楽四重奏団の演奏にはきけなかつたものである。音楽は、ときどきこういう大きな喜びを与えてくれる。」(四二頁) そのヒンク先生が今日いらしています。こういう思いがけないいろいろな楽しみが、遠山先生のご本にはありますね。

「著述・論稿目録」をご覧くださいますと、最初の方の「モーツァルトと自由」、これは一九七八年に『ユリイカ』に発表されたもの、それからその後のエッセイの「モーツァルトと自由」。この「自由」が、モーツァルトの非常に重要な特徴であろう、と語っておられます。私は、モーツァルトの音楽の本質は、「超越—トランスセンス」であるとして、その「超越」という立場から、作品論を展開しているわけですが—遠山先生はそれを勿論ご覧になつていて、ご存知のはずですが—、先生のご本を隅から隅まで読ませていただいても、「超越」という言葉は確か一度しかお使いになつていません。海老澤のそれを避けたな、という感じもしないでもないですが、私が主張していることと、遠山先生がおっしゃっていることは、決して違わないんです。遠山先生は、あらゆることから自由—自由だということとは拘らないということ、自分の世界を充分に展開しているということなんですね。私は、それが音楽史的なものであろうが、交響曲のように新しく出たジャンルであろうが、その他のジャンルであろうが、すべてのジャンルの制約を越えている、表現も古典派を超える、という意味で「超

越」と言っています。こういうことも先生と一度お話をしたかった、と思っております。

こうしたお話はあれこれありますが、ちょうど時間がまいりました。くりかえし申し上げます。遠山先生とは、ご生前にモーツァルト論を戦わせたかったです。先生は、最初の頃、モーツァルトでは書かない、書けない、とおっしゃっていたのですが、だんだん歳を重ねられて、二〇〇〇年代になって、モーツァルトも書かなければ、と思われたのでしょうか、分量としてはコンパクトですけれど、素敵なモーツァルト論を残して下さいました。遠山先生ありがとうございます。皆様ありがとうございます。

(えびさわ・びん 日本モーツァルト研究所所長・音楽学)

遠山一行 モーツァルト関係著述・論稿等目録

タイトル	刊年/年月次	掲載書(誌)
音楽史上に於けるモーツァルトの位置	1951.7	『レコード音楽』21(7)(名曲堂), pp.6-11
古典について「かみかえなない百曲1」	1962.1	『芸術新潮』13(1)(新潮社), pp.68-71
モーツァルトと自由	1978.11	『ユリイカ』12月臨時増刊:総特集「モーツァルト」10(15)(青土社), pp.8-10
対談モーツァルトと二十世紀 (遠山一行+高橋英夫)	1979.6	『音楽の手帖「モーツァルト」(青土社) pp.160-173
モーツァルトと自由	1981.9	遠山一行著『音楽とともに』(小沢書店), pp.59-72; 『遠山一行著作集2』(1986年12月, 新潮社), pp.199-205
モーツァルトと成熟	1981.9	遠山一行著『音楽とともに』(小沢書店), pp.73-78; 『遠山一行著作集2』(1986年12月, 新潮社), pp.206-208
古典について モーツァルト	1986.12	『遠山一行著作集2』(新潮社), pp.11-16
音楽手帖「モーツァルトとオペラ」	1994.11	『群像』49(11)(講談社), pp.340-343
モーツァルトの現実性	1995.6	遠山一行著『日付のある批評 1992~94・東京日記』(音楽之友社), pp.10-19
ウィーンのモーツァルト	1995.6	遠山一行著『日付のある批評 1992~94・東京日記』(音楽之友社), pp.246-253
モーツァルト断章(1)オペラについて	2002.11	『新潮』99(11)(新潮社), pp.330-335
モーツァルト断章(2)交響曲の謎	2002.12	『新潮』99(12)(新潮社), pp.276-281
モーツァルト断章(3)危機と自由	2003.2	『新潮』100(2)(新潮社), pp.276-281
モーツァルト断章(4)ピアノ協奏曲の世界	2003.3	『新潮』100(3)(新潮社), pp.298-303
モーツァルト断章(5)ミサ曲を聴く	2003.4	『新潮』100(4)(新潮社), pp.308-313
モーツァルト断章(6)『イドメネオ』など	2003.6	『新潮』100(6)(新潮社), pp.276-281
モーツァルト断章(7)エロスの諸相	2003.7	『新潮』100(7)(新潮社), pp.330-335
モーツァルト断章(8)コシ・ファン・トゥッテ	2003.9	『新潮』100(9)(新潮社), pp.279-283
モーツァルト断章(9)魔笛について	2003.11	『新潮』100(11)(新潮社), pp.372-376
モーツァルト断章(10)バレットのこと	2004.2	『新潮』101(2)(新潮社), pp.321-325
モーツァルト断章(11)1791年、そして『レ...	2004.4	『新潮』101(4)(新潮社), pp.304-309

〈コラム 著作権あれこれ③〉

人工知能と著作権

飯田浩司

昨今は、人工知能（AI）についてのニュースが毎日のように報じられるようになってきています。昨年一二月には、野村総合研究所がオックスフォード大学の教授と実施した調査の結果を公表していますが、これによると一〇年から二〇年後には、日本の労働人口の四九パーセントが人工知能やロボット等で代替可能になるということです (https://www.nri.com/jp/news/2015/151202_1.aspx 参照)。

同報告は、さらに、人工知能やロボット等による代替可能性が高い職業と低い職業をそれぞれ一〇〇種紹介しており、この中で作曲家は代替可能性が低い職業に挙げられています。

確かに、作曲家がすべて人工知能に置き換わってしまうということは考えにくいように思います。しかし一方で、作曲という創作活動に人工知能がなんらかの形で利用される機会はますます増えるであろうことは容易に想像できます。初期の人工知能による作曲は、過去の楽曲のデータ、和声学や対位法などの楽理を基にした模倣的な作品が少なくありませんでした。しかし、今や IANUS という人工知能は模倣の域を超えたオーケストラ曲の作曲も可能にするに至っています (<https://www.youtube.com/watch?v=PzrcqpnZqA> 参照)。

それでは、こういった人工知能による作品に著作権は認められるのでしょうか。人間が人工知能を創作活動の道具として使用している場合は、現行の著作権法の下においても、できあがった作品を著作物として捉え、創作活動を行った者が著作権を取得する

ことになろうかと思われます。しかし、今や人の関与がほとんどない状況で、人工知能が自律的に創作活動を行うケースが増えてきています。現行の著作権法は、人間の思想または感情が人間の創作活動によって表現されたものを著作物として想定していますから、人工知能による自律的な音楽作品は、保護の対象から外れてしまうおそれが指摘されています。こういった事態を受け、政府は、本年五月に発表した「知的財産推進計画 2016」において、人工知能による創作物の保護について具体的な検討を進めることとしています。

(いいだ・ひろし 副音楽館長 本学経済学部教授)

資料受人報告

石井基斐資料を受贈

昨年十一月八日、作曲家故石井基斐氏（一九三三—二〇一



三)の資料を受贈、記念文庫「石井五郎資料」に収め、「石井五郎・基斐資料」とした。

国立音楽大学に学んだ石井氏は、作曲を江崎健次郎氏に師事、一九六四年、六五年と連続して毎日音楽コンクールに入選して頭角を現した。七

〇年代以降はおもに音楽文化協会「プレゼンテーション」を発表の場として個性的な作風の意欲作を次々世に送っている。父は作曲家石井五郎、伯父は舞踊家石井獏。同じく作曲家の石井敏、眞木は従兄弟。

今回受け入れた資料は、「電子音とピアノによる（Q…）」（一九七〇）、「と・り・お」（メッセージ、バリトン、ソプラノ、ピアノ一九七九）、「Nostalgie」（ソプラノ、バリトン一九八四）などの自筆譜のほか、演奏会プログラム、録音資料。石井五郎氏の声楽曲、団体歌などの手稿譜も併せて受贈した。

「塩見允枝子資料」を新設

四月七日、作曲家塩見允枝子氏の作品資料を受贈、記念文庫

「塩見允枝子資料」を新設した。



塩見氏は、東京藝大在学中に小杉武久、水野修孝らと「グループ・音楽」を結成、一九六四年渡米後は「フルクサス」に参加して、先鋭的で思索に満ちた「イヴェント」作品を展開した。帰国後は、ことばを中心とした室内楽や

電子テクノロジーに関心を寄せた作品を多数発表、国内外で高い評価を得ている。

受入資料は、「鳥の辞典」（ソプラノ、ピアノ、テープ一九七八）、「もし我々が五角形の記憶装置であったなら」（ソプラノ、メゾ・ソプラノ、テノール2、バス一九七九）、「時の戯れ」（ピアノニスト、チェリスト、講演者 一九八四）ほかの自筆譜と、出版譜、録音資料である。

なお、塩見氏旧蔵のフルクサス関係資料は国立国際美術館に収蔵されている。

「杉山長谷夫資料」に追加



- 七月二十七日、作曲家故杉山長谷夫氏の自筆譜、出版譜を追加受贈した。資料は「忘れな草」(勝田香月詩 一九三三)、「苗や苗」「金魚屋」(いづれも林柳波詩 一九四二)ほか自筆譜およそ百点、『はせを小唄曲集その一 出船』(シンフォニー楽譜 一九二二)、『はせを小唄曲集その二 出船』(シンフォニー楽譜 一九二二)をはじめとする出版譜約八十点である。

日誌から

二〇二五年十二月〜二〇二六年八月

■二〇二五年

- 一一・一 浜松市楽器博物館「和魂洋才」オーケラウロと大倉喜七郎「展」資料提供(平尾貴四男文庫ほか。12・7まで)。
- 一一・二六 タイより、マヒドン大学名誉教授 Poonpit Analyakul 氏、作曲家 Pasinee Sakulsurat 氏来館、見学。
- 一二・一〇 新OPAC、館内での運用開始。
- 一二・一〇 館名を「遠山一行記念日本近代音楽館」に変更。
- 一二・二二 館報第四号発行。
- 一二・二四 冬期休館(1・6まで)。

■二〇二六年

- 一・二七 BS朝日「黒柳徹子のコードモノクニ名作あかとんぼ誕生秘話詩人・三木露風の世界」に資料協力(山田耕笹文庫)。
- 三・八二〇一五年度第二回収書委員会開催、資料受人等について協議。
- 三・一二 東大駒場博物館「近代アジアの音楽指導者エッケルト」展に資料協力(警視庁音楽隊所蔵旧陸軍音楽隊明治期楽譜。6・26まで)。
- 三・二五 国立国会図書館デジタル化資料送信サービス利用開始。
- 四・一 収書委員会専門委員委嘱。岡部真一郎(委員長)、塚原康子、西村朗、渡辺裕、樋口一、望月京、山下裕二、和田ちはる(新任)。

四・五 CD 『中村愛風と愛く日本のハープ音楽80年』（キングインターナショナル）に制作協力。

四・二七二〇一六年度第一回運営委員会開催。

五・二四 マイクロフィルムスキャナー入れ替え。

六・八 記念文庫中の遺品の一部（賞牌等）を学外専門倉庫に預入。

六・二八 本学文学部芸術学科望月・和田ゼミ見学。

六・二四 音楽図書館協議会二〇一六年度総会出席。

七・一 明治学院大学『白金通信』第四八五号巻頭「MG Collection 受け継がれるもの」07に資料紹介。

七・一六 世田谷文学館「生誕一〇〇年映画監督・小林正樹」展に資料提供（武満徹文庫。9・15まで）七・二六二〇一六年度第一回収書委員会開催、資料受人等について協議。

八・一 テレビ朝日「クイズプレゼンバラエティーQさま」に資料提供（山田耕筰文庫）。

八・三 昭和音楽大学大学院生見学。

八・一一 夏期休館（8・20まで）

八・二三 日本著作権協会出版部来館。管理作品の複写に関して協議。

編集後記

館報五号をお届けします。今号は塚原康子氏にご寄稿いただき、また、飯田浩司副館長によるコラムは連載三回目となりました。編集作業中、昨年レクチャーコンサートにご出演いただいた篠原、北田両氏所属の「カルテット・アマビレ」が、ミュンヘン国際音楽コンクールで三位入賞とのニュースが飛び込んできました。心から拍手を送り、益々のご活躍をお祈りします。制作にあたり、今回もひとま舎上村様には一方ならぬお世話になりました。ありがとうございました。（七階人）

第五号 二〇一六年一月一日発行

編集発行人 秋月 望

発行所 明治学院大学

遠山一行記念日本近代音楽館

東京都港区白金台一―二―三七